

スマートモブズの混沌とした未来

石橋啓一郎 (GLOCOM研究員)

8月25日、六本木アカデミーヒルズ(六本木ヒルズ内)にて、ハワード・ラインゴールド著、公文俊平・会津泉監訳『スマートモブズ 〈群がる〉モバイル族の挑戦』の出版を記念して、「スマートモバイル・ワークショップ2003」が開催された。このイベントでは、著者のラインゴールド氏、NYCワイヤレスのアンソニー・タウンゼンド氏による講演の後、パネルディスカッションが行われた。

このイベントは、一言で言えばスマートモブズの「異質さ」と、その将来がいかに混沌としているかを実感させてくれる内容であった。

まず最初に、ラインゴールド氏から著書『スマートモブズ』の概要が説明された。スマートモブズは、モバイルでパーベイシブ(pervasive)な環境、ウェアラブルコンピューティング技術、分散コンピューティング技術に支えられ、評判システムの技術を利用し、直接知らない人たちとも互いに協力して行動する人々の集合だ。ラインゴールド氏は、そのスマートモブズが創発的(emergent)な秩序・知性を持つだろうと予想している。氏は、スマートモブズ的な活動の原始的な例として、SMS(Short Message Service)で連絡を取り合って組織されたデモによって倒されたエストラーダ政権を挙げ、さらにスマートモブズが実現するための要素技術であるパーベイシブ環境、評判システムなどについて、現在進んでいる事例などを含めて説明した。スマートモブズが相互監視を通じて協力し合う像を説明しつつ、監視や個人情報など人間の自由にかかわる問題についても論じた。続いてタウンゼンド氏は、NYCワイヤレスの事例について説明した。NYCワイヤレスはNPOで、ニューヨークの公園で公衆無線アクセスサービスを提供する活動を行いつつ、世界の無料無線アクセス提供活動とも連携している。

二人のプレゼンテーションの後、スタンフォード日本センターの中村伊知哉氏をモデレーターとして、パネル

ディスカッションが行われた。パネリストは、國領二郎氏(慶應義塾大学)、磯井純充氏(六本木アカデミーヒルズ)、東浩紀氏(GLOCOM)、公文俊平氏(GLOCOM)、丸田一氏(UFJ総合研究所/GLOCOM)、山田肇氏(東洋大学/GLOCOM)の6名であった。パネルディスカッションでは、まず日本のモバイル文化は進展するのか、「協力と競争」を技術がどうエンパワーできるのか、といったテーマで意見が交換された。携帯とインターネットの利用法の違い、外国で起きていることには注目するが国内には目を向けない日本の文化、これまでのマスメディア的情報生産・消費の構造とスマートモブズ時代の情報生産・消費の違いはあるかなど、話題は多岐にわたった。その後に行われた質疑応答の後半では、スマートモブズ化が進んでいると言われながら、情報通信技術を利用した民主化が進んでいるわけではないという意見が出され、民主政治と情報通信技術の関係について、ひとしきり議論が行われた。

率直に言って今回のワークショップは、興味深い話題が多かったものの、全体として発散しすぎた感が否めない。これは、そのまま『スマートモブズ』に対する人々の基本認識と、その先の社会への期待のばらつきの現れであつただろうと思う。まずはいろいろな場で議論を進め、基本認識を共有するところから始めることが必要ではないだろうか。